

ラテンアメリカ

随想

コロンビアという国 知られざる大国

森下 敬一郎

ラテンアメリカ（中南米）で大国と言えば、どなたでもブラジル、メキシコをまず思い浮かべるであろう。それでは、これらに次ぐ国は？といえば、経済規模ではアルゼンチンが第3位となる。それでは、人口で比較した場合は？と問われると結構難問かもしれない。答えは、コロンビアである。2019年コロンビアの人口は5037万人となり、先の2大国以外で中南米において人口が5000万人を超えるのはコロンビアのみである。

多様性に富む国

コロンビアは、西にアンデス山脈が3本に分かれて走り、その東は広大な低地部となっている。その低地部の北部は熱帯サバンナのジャノ平原、その南部はアマゾン側の支流が流れる。コロンビアの国土は、日本の3倍であり、世界

の陸地面積の0.8%しかないが、ブラジルとインドネシアに続く、世界で3番目に生物多様性に富んだ国であり、コロンビアは鳥類の種類が世界一多いと言われる。地球上に存在する9,000以上の鳥類のうち、約1,800種がコロンビアに生息する。そのため、日本からバードウォッチングツアーも催行されており、ボゴタ近郊でも様々なハチドリを見ることが出来る。

また、多様性という点では、民族も様々である。ボゴタで専ら付き合うのは欧州系の人が多いが、地方では先住民の人達がそれぞれの文化を守って暮らしている。シエラネバダに行けば、アルアコ族の人たちが山の雪を模した全身白づくめの服装で、日本の盆踊りのような踊りを踊って歓迎してくれる。一方、太平洋岸やカリブ岸の町にはアフロ系の人たちが多く、いかにも

ラテンのリズムでサルサを踊る。

二つの大洋に面する国

南米において、太平洋と大西洋の二つの大洋に面しているのは、コロンビアだけであり、北中米と南米の結節点として地政学上重要な位置を占める。その海岸線の合計は3,000kmに及ぶ。特に近年、コロンビアは伝統的な欧米との関係に加えて、発展するアジア太平洋諸国との関係を重視しており、2012年に太平洋同盟をメキシコ、ペルー、チリと共に結成した。一方、アジア太平洋との関係では、太平洋同盟参加国の中でコロンビアのみAPEC（アジア太平洋経済協力）のメンバーになっていない。コロンビアがAPEC参加を希望するのはもっともであり、また、コロンビアが参加する資格が無いと考える国は無いであろうが、新



ボゴタ近郊のハチドリ（以下、記載無い限り筆者撮影）



アルアコ族の歓迎の踊り

規参加自体が事実上凍結されているので如何ともしがたい状況である。また、コロンビアのみが日本とEPA（経済連携協定）を締結できておらず、早期の締結が望まれている。

コロンビア人の気質

コロンビア人は先述のとおり、多様であるが、あえて一般的に言えば穏やかで優しい、la gente querida（いい人達）である。さらに、意外なことにはっきりとNoと言うことを避けて、日本的なところがある。また、労働者としては勤勉であり、在コロンビアの日系企業はコロンビア人従業員を高く評価している。

ボゴタの気候

ボゴタで勤務していると日本の友人に話すと、暑いでしょう、とか、今は冬ですか、とか聞かれ、ボゴタの気候は想像しがたいようである。ボゴタは北緯4度に位置する一方で標高が2,600mなので、一年中春である。ただ、春と言っても、昼間でも20度には上がらず、夜は10度を切るのだから寒く、昼間でも歴史的建造物である外務省や大統領府における行事出席時にはヒートテックの下着が必須である。ボゴタの気候は花づくりに適しており、近郊にはビニールハウスが並び、日本にも多くの切り花が輸出され、特に母の日のカーネーションの大半はコロンビア産である。

コロナ禍とコロンビア

コロンビアにおいては新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の最初の症例が2020年3月6日に確認された。その後、隣国との



“El Tiempo”紙1面に掲載されていた、今日は偶数日なので奇数の人のみ外出可という注意

国境封鎖、国内線・国際線の旅客便発着の禁止、強制的自宅待機措置が取られた。

強制的自宅待機措置は、生活必需品購入など例外事項以外は外出を罰則付きで禁止する厳格なものであり、ボゴタにおいて3月20日に開始されてから8月末まで続いた。

密を避ける措置

また、クラウディア・ロペス・ボゴタ市長は、例外事項による外出のために密となることを避けるため、性別による外出制限を4月に実施した。女性は偶数日、男性は奇数日のみ外出を認める、トランスジェンダーの人は自認する性を適用できるとした。ロペス市長は、身分証明書で確認するの必要が無く、感染防止に有効と考えたようである。市長は女性で、短髪で男装の麗人という風であり、そのパートナーも女性であることから、性別による制限を考えたのは意外であった。奇数の日、男性が買い物に行って要らない物を買ってくるので、偶数の日、女性が返品に行く、という笑い話も出て、

実際あまり機能しなかったようで、この男女別の措置はすぐに撤廃された。

その後、密を避ける方策としてボゴタ市ほかでは、身分証明書の末尾番号による商業施設などへの入店制限を導入した。身分証明書の末尾番号が奇数の人は奇数日、偶数の人は偶数日に、スーパーマーケット、レストラン、商業施設、銀行への入店などが制限され、また、入店は各世帯1人のみ認められる。

なお、この身分証明書による外出制限は、Pico y Celda（ピークと身分証）と呼ばれる。この呼び名はボゴタ市のひどい交通渋滞を緩和するために、車のナンバープレートの末尾が偶数か奇数かで使用日を制限する制度Pico y Placa（ピークとナンバープレート）から来ている。

一時は累計感染者数が世界5位に

前述のとおり、コロンビアは3月に初めて感染者が出てから、迅速に国境封鎖、厳格な外出禁止措置を打ち出し、6月までの感染者数増加は緩やかなものであった。イバン・ドゥケ大統領が自ら毎夕テレビ出演して政府の対応を説明したこともあり、ずっと低かったその支持率が上昇したほどであった。しかし、7月に1日の新規感染者数は1万人を超え、第一波のピークとなり、一時は累計感染者数が世界5位となった。その後減少したものの、本年1月に1日の新規感染者は2万人を超え、第二波のピークを迎えた。幸い3月上旬は、3500人程度となり減少傾向である。なお、コロンビアでは日本と同じ2月17日に新型コロナワクチン接種が開始された。



自転車天国

自転車専用レーン拡張

新型コロナ感染防止のためにボゴタ市他では、公共交通機関の乗車率を低く抑え、そのために自転車利用を推奨した。もともとコロンビアは自転車競技が盛んで、2019年のツール・ド・フランスでエガン・ベルナル選手が歴史的な優勝を成し遂げている。そして、毎日曜にはボゴタの主要道路計約128kmが自転車天国になっている。このような背景もあり、ロベス・ボゴタ市長は昨年一挙にボゴタ市内主要道路の1レーンを自転車専用にしてしまった。

これはコロナ感染予防と環境保全の観点からはもちろん良いことであるが、人口が1000万人を超えるとされるボゴタ都市圏には地下鉄も鉄道も無く、2000年に導入されたトランスミレニオ（バス高速輸送システム）があるのみである。その専用レーンも一部しかなく、輸送量はもう限界を超えているが、これを改善するための新交通システムの建設は始まったばかりである。今後交通量が元に戻った時の渋滞が心配である。

ベネズエラ避難民

本年2月8日、ドゥケ大統領はグランディ国連難民高等弁務官とともに、コロンビアに存在するベネズエラ避難民に一時的保護を与える法令を発表した。10年間を限度として、正規の滞在資格を与え、就業も可能とする。ベネズエラの危機のため、500万人以上のベネズエラ人が国を逃れ、そのうち180万人近い人々がコロンビアに存在する。そもそもコロンビアがスペインから独立した時の英雄ボリーバルはベネズエラ出身であり、コロンビアとベネズエラは、パナマ、エクアドルと共に一つの国、大コロンビアとして独立した。コロンビアが暴力で苦しむ大量の避難民が発生した時にはベネズエラが彼らを受け入れ、また、コロンビアの産業にとってベネズエラは重要な市場であった。今、ベネズエラの混乱によって、この状況は一変し、コロンビアが兄弟国としてベネズエラ避難民を寛大に受け入れている。とはいえ、これはコロンビアにとって経済的、社会的に大変な負担であり、国際社会

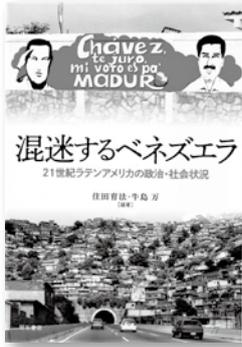
の支援が必要である。日本も2019～20年にUNHCR（国連高等弁務官事務所）及びIOM（国際移住機関）に対して計810万米ドルの資金協力を行ってきている。

コロンビアとのさらなる関係強化を

本年2月、今回で3回目となる日本コロンビア企業フェアがオンラインで開催され、コロンビア内外から36の日系企業・団体が参加した。これにイバン・ドゥケ大統領がビデオメッセージを寄せて、日本との貿易、投資の拡大への期待を表明するとともに、コロンビアの成功はコロンビアに信頼を寄せてくれる人々の成功でもある、と述べた。

コロンビアは、左翼ゲリラFARCとの和平合意の履行や麻薬組織との戦いなどまだ困難な道を歩んでいる。しかし、コロンビアの将来性、潜在性ということでは、例えば、鉱物資源では、伝統的な石油、石炭に加え、アンデス山系はベースメタル資源のポテンシャルが高いと推定され、今後、更に治安状況が改善されれば、金属資源開発が活発になる可能性が高い。また、農業についても、コロンビアは農業用地に占める未利用の土地の比率が非常に高く、農地拡大ポテンシャルが高い国である。多様性と潜在性に富むコロンビアとの関係を強化することは、日本にとって大きな意義を有する。今後コロナ禍が収束して、コロンビア訪問が可能となれば、ぜひ今のコロンビア、コロンビア人に直接触れてその魅力を知って頂ければと思う。

（もりした けいいちろう 在コロンビア
日本国大使）



『混迷するベネズエラ 21世紀ラテンアメリカの政治・社会状況』

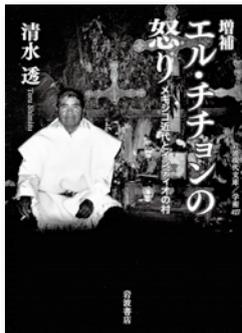
住田 育法・牛島 万編 明石書店
2021年3月 255頁 2,600円+税 ISBN978-4-7503-5173-5

かつて産油国として、1980年代頃までは格差は大きかったもののラテンアメリカ随一の豊かな国と言われ多くの移民を受け入れ繁栄したベネズエラだが、今は経済、社会の混迷により疲弊し、400万人とも見られる国外脱出者が出てその面影は全く無い。奇しくも本号では、データに拠って破綻に至った経緯を冷静に解明しているベネズエラ専門家による『ベネズエラー溶解する民主主義、破綻する経済』の紹介も載せているが、それに対し本書はラテンアメリカを専門とするベネズエラの見方の立ち位置も異なる7人の研究者が、反米／親米、保護主義／開放主義、格差是正／経済発展優先をそれぞれの視座で主張しながら、自身の専門分野から現代ベネズエラを学際的に論じたものである。

「《人の移動》から読み解く現代史」では移民送出国への歴史・構造的要因を探り、「他のラテンアメリカ諸国との共通性と相違点」ではチャベス政権前後の他国での左右政権と比較し平等だけでなく自由とバランスが課題と示唆、続く「比較の視座 1999年憲法改正」はエクアドルとの比較でチャベス政権の危機の原因はこの憲法改正に有ったと指摘している。一般的なこれまでのベネズエラ観に対し、チャベス、マドゥーロ政権を支持する立場から国際報道の信憑性に疑義を呈した「何が真実か？」と、危機の原因は二代政権の経済失政よりも産業構造の多様化の失敗とともに米国経済封鎖が主因との異論紹介も載せていて、最後にブラジル左派ルーラ政権のチャベス政権との連帯、メキシコ外交の基本の一つである不干渉主義の意義を総括として取り上げている。

これらの論考を通して読んでも、現政権が主張する負の要因を是とし、米欧の制裁・干渉を止めさせれば、国民が対話に依って状況打開へ歩み寄ることに繋がるのかは疑問無しとしなが、敢えて様々な主張を1冊で見ることが出来るという意義は大いにある。

(桜井 敏浩)



『増補 エル・チチョンの怒り -メキシコ近代化とインディオの村』

清水 透 岩波書店 (岩波現代文庫／学術 427) 岩波書店
2020年12月 401頁 1,620円+税 ISBN978-4-00-600427-9

メキシコ最南端チアパス州のチャムーラ村はマヤ系先住民の村である。ラテンアメリカ社会史・オーラルヒストリーを長く専攻してきた著者は、1979年からロレンソ一家と親交を結び、メキシコ革命から今日に至る近代化の激動の中で翻弄されてきた共同体と一家の姿を、圧倒的な力をもつ外部世界とのせめぎ合いという視点から、歴史、宗教、社会生活、そして政治行動など多面的に分析し、彼らが如何に一方的に押し流されるのではなく主体的に自分たちのアイデンティティ再編を強めてきたかのを明らかにしようとしている。

本書の初版は1988年に東京大学出版会の『シリーズ 新しい世界史』の第10巻として刊行されたもので、本書の第I部はほぼそのまま再録されているが、増補版では1970年代に始まる激変の象徴として、ロレンソ一家の若い世代の者を含む多くのマヤの民が危険な砂漠を越えて米国に越境する姿、そこから帰る者、残る者の問題と、2019年現在のロレンソ一家の今を紹介している。

一家の“ミクロな歴史”をメキシコの“近代化”の歴史に逆照射し、近代西欧的な価値感での歴史観に組みすることも古きよき“共同体”を美化することもなく、これまで語り継がれてきたマクロの歴史の実態を見ようとした優れた歴史物語。

(桜井 敏浩)